不思議の森から Volume 11

THE YOKOGURAYAMA NATURAL FOREST MUSEUM NEWS, Ochi July 2004

■横倉山自然の森博物館ニュース

仁淀川・片岡橋（越知町）

「沈下橋」のある川 ―仁淀川―

「沈下橋」と言えば、"日本最後の清流"として知られる高知県の四万十川が有名であるが、四万十川に優るとも劣らない清流・仁淀川にも、本流・支流に大小計14橋ほどの沈下橋が架かっている。それらの中には、今なお地域の人々の生活には欠かせない"生活の道"として利用されているものがある。越知町内には沈下橋が最も多く残っているが、その中の一つに「片岡橋」がある。地元住民が高知県須崎市で開かれた母親大会で、それまで渡し舟によって片岡地区と南片岡地区を往来していたのを、大水が出ても学校へ行ける便利な"沈下橋"の設置を訴え多くの賛同を得、その後の「高知県母親大会」、東京での「母親大会全国大会」でも共感を与え、結果的に県の建設の認可が下り、昭和40年に建設工事が始まり、発言から５年の歳月を経て完成した。長さ：96㍍、幅：3.5㍍の堂々とした沈下橋で、以後子どもたちは大水が出ても安全に学校へ行けるようになり、子どものことを思う母親の熱意で完成までこぎつけた全国でも例のない橋で、建設運動は母親大会史上特筆されるものであったと今でも教訓として残っている。橋の完成までのいきさつは、地元片岡小学校の生徒たちが「高知県母親大会全体会発表」用に作成した『沈下橋がかかった－片岡沈下橋の建設－』（1998年）で紹介されたことがあり、地元住民にとっては大変思い出深い、趣きのある橋で、夏には水遊びの子供たちの姿で賑わう。

現在仁淀川の本流には、６橋の沈下橋があり、その半分が越知町内にある。かつては、もっとたくさんあったが、時代の流れとともに車のすれ違いのできる安全で新しい近代的な橋にとって代り、次々にその姿を消していった。失われていくものへの寂しさを感じる。先人たちの築いた、そして、地域の人々のいろんな思い出の詰った貴重な財産、"芸術"を後世まで伝えていきたいものである。

横倉山自然の森博物館では、今年の夏の企画展：『仁淀川の自然展』（７月24日～９月５日）で、沈下橋を含む清流・仁淀川流域で見られる動植物、魚類、河原の石などさまざまな魅力ある事物を写真・実物で紹介し、河原の石で作った岩絵の具による描画体験も行う。また、『仁淀川フォトコンテスト』（募集締切り：平成17年１月15日）ではそれらの写真を募集している。

ナウマン博士による佐川盆地のスケッチ

安井　敏夫

エドムント・ナウマンは、明治政府によって日本に招かれたドイツ人地質学者で、東京大学最初の地質学教授として日本の地質学の基礎を築いた。ナウマン博士は、1875年（明治8）に来日し、1885年（明治15）に帰国する滞日10年の間に日本中を隈なく調査し、日本列島の地質の概略を『日本の地質』（最初の日本列島の地質図）としてまとめヨーロッパに紹介した。

ナウマン博士は、1883年と1885年の2回にわたり地質調査のため四国を訪れているが、その結果については『四国山地の地質』（E. NAUMAN und M. NEUMAYR：1890）という論文の中にまとめられている。ナウマン博士は、その中で9編のスケッチを掲載しているが、その一つに佐川の介石山（古くは貝石山）〔標高：262.2〕※1から南の佐川盆地方向を眺めて描いたスケッチ―『介石山から見た佐川盆地』〔図-1〕―がある。今から110年以上も前のものなので、植生が大きく変わっていて現在は山の頂上からはスケッチに描かれた地形は望めないが、山頂に建つ鉄塔に登って眺めると、ほぼそれに相当する光景を見ることができる。スケッチの中には、日本の地質学における地層の標準地である、Torinosu（鳥巣）、Zohoin（蔵法院）、Kochigadani（川内ヶ谷）などの地名を読み取ることができる。ちなみに、介石山と言えば、地元出身の植物学者・牧野富太郎博士が二十歳の1882、1883年（明治15、16）頃、よく化石採集に出かけこの山で*Chladophlebis*, *Onychiopsis*などのシダや*Zaminophyllum*というソテツ類の化石〔領石植物群：中生代白亜紀〕を採ったことでも知られる。また、南麓の下山地区には、古生代ペルム紀の四射サンゴ（*Waagenophyllum*）や高知県の同時代のものとしては唯一の産出である三葉虫など特異な化石を含む『下山石灰岩』が存在することで地質学上有名である。

E.ナウマン博士〔資料提供：フォッサマグナミュージアム〕

一方、ナウマン博士は、論文の冒頭に、佐川盆地周辺の地形図（ルートマップ）〔『佐川の盆地』（5万分の1）〕〔図-2〕を付けているが、その中には、OCHIMURA（現越知町）、SAKAWAMURA（現佐川町）、KUSAKAMURA（現日高村）などの地名と共に、所々に地層の走向・傾斜と岩石・化石名が記されている。その中には、旧佐川村の蔵法院の*Monotis*と*Halobia*の産地、川内ヶ谷周辺の*Monotis*層や旧日下村の*Torigonia*層のことが記されている。また、両村の境付近にはIdsumisandst.（Idsumisandsteinの略で、英名Izumi sandstone：和泉砂岩）の名も見られ、紀伊半島から四国西部にかけて中央構造線の北側に分布する和泉層群中の砂岩（"和泉砂岩"）〔白亜紀後期〕と同様の砂岩※2が採石されていることも記されている。さらに、その位置・地形から判断して、明らかに「横倉山」と思われる山も描かれており、実際、論文中には次のような記述が見られる。「佐川の北西には横倉山がそびえ、その頂部は裸の岩石を戴いている。それは高さ800mに達する。その下を仁淀川が流れている。」、「佐川の北西およそ8㎞のところに横倉の岩山がそびえ、これは遠くからも

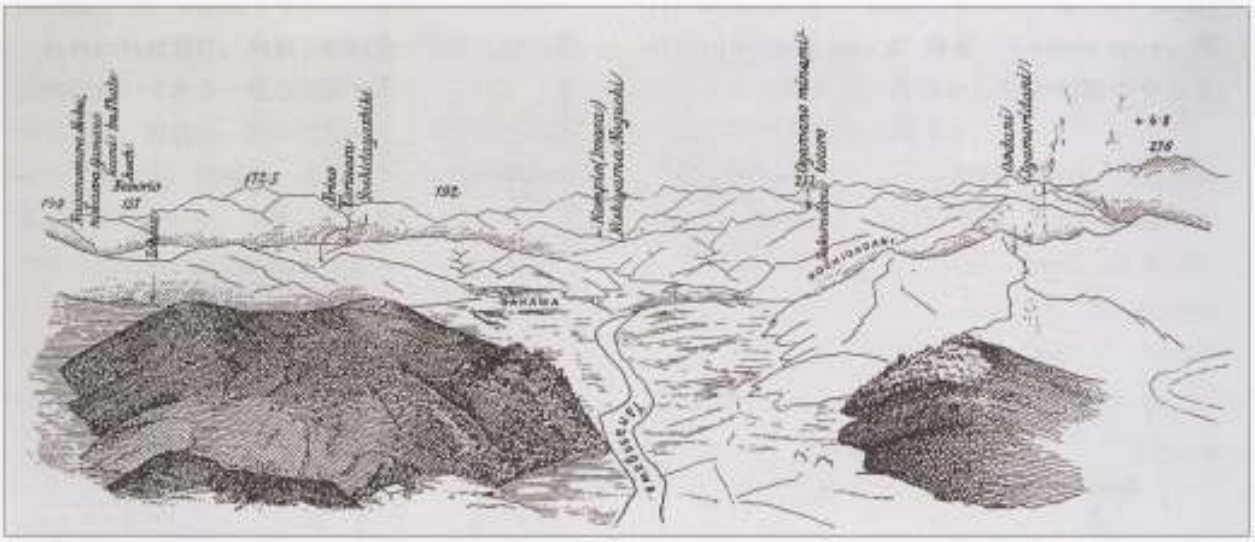

図-1　介石山から見た佐川盆地

図-2　佐川の盆地〔京都大学理学部地質学鉱物学教室図書室所蔵〕

見えている。その高さは約800mである。その堂々たる山の壁は仁淀川の右岸に階段状に高まっている。この山は石灰岩、砂岩、角岩（チャート）、蛇紋岩、花コウ岩、含絹雲母石英片岩などからなっている。横倉山はこの盆地周辺における最高点である。」（山下 昇 訳）。ただし、ここで言う横倉山を構成する岩石の種類については、東京大学の奈佐忠行（後に「本多」に改姓）の卒業論文（1885、MS）中の岩石記載と種類も順序も全く同じなので、ナウマン博士がそのまま引用したものと考えられる。実際、奈佐氏の卒論は現存しないが、それを抜き書きした“ナウマン博士の直筆ノート”（糸魚川市立「フォッサマグナミュージアム」所蔵）が残っている。余談ではあるが、これ（山下 昇 判読）によると、「横倉山」の読み方には、『よこくらさん』『よこぐら』『よこぐらさん』の少なくとも3通りがあったことがわかる。現在、地質学の世界では『よこくらやま』であるが、牧野富太郎博士（1862～1957）の発見・命名による「ヨコグラノキ」（1898年命名）、「ヨコグラツクバネ」（1912年命名）などのように、植物学の世界では『よこぐら』であり、一定でない。但し、ナウマン博士自身は地形図（ルートマップ）上では『Yokokura』（ヨコクラ）と地名を表記している。

ちなみに、奈佐氏は横倉山のシルル紀の石灰岩を中生代の三畳紀のもの、ナウマン博士は漠然と古生代のものとして扱っており、共にその当時まだシルル紀の石灰岩の存在には気付いていなかった。横倉山の石灰岩がわが国最古の古生代シルル紀のものであるとわかったのは、実にその半世紀後のYabe, H and Sugiyama, T.（1942）による。

※1　牧野富太郎著の『牧野植物一家言』（北隆館、1956）の中の「佐川の化石」の項に、「佐川の貝石山は、貝の化石が出る事に由って土地で有名であるのだが、……私の少年時代には、其山頂が露出していたが、今は樹木が茂って其れに覆はれている」とある。実際山頂付近からは白亜紀後期の汽水性の二枚貝の化石の産出の報告がある。

※2　土佐の“青石”と呼ばれ、かつてまだコンクリートが普及していなかった頃、道路の擁壁や川の護岸用の石材、さらには墓石としてあちこちで切り出されていたものか？　越知町内にも“田鶴石”と呼ばれる同様の石材がある。

〔引用文献〕
山下　昇（1996）：日本地質の探究　－ナウマン論文集－
山下昇　訳、東海大学出版会

（やすい としお／横倉山自然の森博物館副館長兼学芸員）

サギ[チュウサギ、アマサギ、コサギ、ダイサギ]のねぐら[夏]

ヤマセミ[夏]

弾丸の様に飛翔するヤマセミ[夏]

仁淀川流域の鳥について

深瀬　茂文（写真・文）

現在日本国内で観察されている野鳥は600種を超え、そのうちの6割に近い種類が高知県で確認されています。仁淀川流域はと言うと、今のところ詳しい資料などがないのではっきりとしたことは言えませんが、私が数年間観察してきた限りでは、留鳥・夏鳥・冬鳥・旅鳥の180種前後が毎年コンスタントに見られ、迷鳥を含めると200種を超えるようです。

これだけ多くの種類が見られるのも、仁淀川流域の多様な自然環境があるからだと思います。源流近くの石鎚山周辺は亜高山帯でシラベなどの大きな針葉樹が多くホシガラスの愛嬌ある姿が見られ、夏にはコマドリやコルリのさえずりが聞こえます。

また、上流から中流にかけては起伏に富んだ複雑な地形になっており、杉などの植林が目立つものの、その険しさ故に人の手が加えられず自然のままの森を残した山も少なくありません。横倉山はその代表と言っていいでしょう。アカガシの原生林などの残るこの山は生き物の宝庫であり、生態系の頂点に立つクマタカの勇姿や高知県の鳥にもなっているヤイロチョウの鳴き声も聞かれるようです。

下流域一帯は平野が広がっていて、森林性の鳥とは違った種類がたくさん見られます。特に冬場の農閑期の田んぼには数多くの貴重な鳥が見られます。ナベヅルやハイイロチュウヒなども毎冬目撃されますし、迷鳥の類が見つかるのもこの下流域が多いようです。

しかし、貴重な鳥がいろいろいるからといって安心はできません。とかくクマタカやヤイロチョウといったシンボル的な鳥たちが保護の対象として取り上げられがちですが、スズメやツバメなどの普通種も確実に減少していることは、鳥を観察しているものとしては痛感せずにいられません。開発などによる自然破壊の影響はクマタカだけでなく全鳥類、そしてあらゆる生き物に及ぼされることを意識しなくてはならないと思います。

私が幼少の頃（四半世紀ほど前）、夏の夕暮れに仁淀川で遊んでいた時に、きらきら輝く水面めがけてダイビングして小魚をとっている無数の白い鳥を見て、「何てきれいなんだろう！」と思ったことを今でも憶えています。この鳥は後になってコアジサシという鳥だとわかりました。当時も含めて以前は夏に日本に子育てにやってくる普通の夏鳥でした。河原や砂浜で集団を作って営巣するため、ただでさえ増水などの影響を受けやすいのに河川工事で中州が消えたり、釣りやレジャーのため４輪駆動車で彼らの集団営巣地を踏み潰（つぶ）したりといった人的被害によって最近では殆ど見られな

い鳥になってしまいました。今仁淀川の下流域に細々とあった彼らの営巣地は渋滞緩和のためのバイパスを通す橋梁工事で残念ながら消えようとしています。しかし、今年もまた彼らがどこか良い場所を探して逞しく生きてくれることを祈っています。

仁淀川流域で見られるいろんな鳥たちの姿を通じて、自然の豊かさを認識してもらい、同時に失われている自然もたくさんあるということに気付いていただけたらと思って野鳥たちの写真を撮り続けています。

（ふかせ しげふみ／日本野鳥の会高知県支部会員）

ホタルが観られるようになった川

越知町内を流れる川に「梅ノ木川」と呼ばれる小さな川がある。コンクリートの三面張りの川幅わずか3メートルの、家庭排水の流れる"越知町で最も汚い川"と言われた川であった。仁淀川の清流を保つために、仁淀川に注ぐこの川の水質浄化を計り、"みんなで梅ノ木川沿いを憩いの場にしよう"とある一人の地元の男性が立ち上がった。ボランティア団体『川と山・ふるさと夢の会』（平成9年発足）の代表・山中伸一氏である。

氏と会のメンバーが中心となって、水路を残して、川底に炭を詰めた袋と石ころを入れた蛇籠を敷き、木炭で汚れた水を浄化しようと試みた。やがて蛇籠の間に溜まった土砂から草などの植物が生え、自然に近い緑の"土手"（岸辺）ができた。蛇籠にはゴミがひっかかるので、毎月第3日曜日に地元の小学生たちと一緒に清掃をして川をきれいにした。そんな川にいつしかホタルの飛び交う姿が見られるようになった。同会と子供たちの苦労が報われ、国からそのボランティア活動が高く評価され、2001年には環境省の水環境部長より表彰された。今年2004年は、6月5日（土）がどうも交尾の時期だったらしく、夜の8時過ぎから約1時間の間、それまで草むらに身を潜めてあちこちで光っていたたくさんのホタルが地上低く舞い上がるようになり、動きが活発になってピークに達した。それまで草一つなかった小さな三面張りの川に見事にホタルまでもが甦り、自然が復活し息吹が感じられるようになった。

氏は、この他にも、町内の休耕田を借りて、会員たちと一緒に休日を利用して、子どもたちが自然の観察ができるようにとの思いで、小さな公園「境谷自然の里」（"めだか池"）を造ったり、小川に子どもたちと一緒に、自分の育てたホタルの幼虫を放流したりもした。平成13年には越知町立横倉山自然の森博物館の主催で、テレビ番組「どうぶつ奇想天外！」でおなじみの千石正一先生をお招きして、こことその周辺の里山を舞台に『生き物観察会』も開催され、多くの町内外の子どもたちで賑わった。

氏は、地元越知町の子どもたちのために、今の子どもたちに一番大切な、"自然に親しむこと""自然を大切にすること"などのいろんな教訓を残して、今年の正月にこの世を去ってしまった。自ら予知した残り少ない人生を故郷のために完全燃焼して。

私たちは、夏になって飛び交うホタルのほのかな光を見る度に、氏のことを思い出すことだろう。

たましひのたとへば秋の蛍かな　（飯田　蛇笏）

横倉山ミニ歳時記

■幸せを呼ぶ？"青いアマガエル"

平成16年5月、越知町内で地元住民が自宅近くで犬の散歩中に、体長約3㎝の体全体がきれいな青色をしたアマガエルを見つけました。高知市の「わんぱーくこうちアニマルランド」の話によると、「特定の色素が欠落してできた突然変異で、非常に珍しい」ということだそうです〔高知新聞掲載〕。アマガエルの体色は、黒色色素胞・グアニン細胞・黄色色素胞の3種類の色素細胞（色素粒）が凝集したり広がったりして変化し、この場合は恐らく黄色色素胞が欠けているためと考えられます。アマガエル自体とても小さくて愛嬌のあるカエルですが、それが青いとなるとなおさら可愛く見えます。でも、当の本人は自分が緑でなく青いことに気付いているのでしょうか？

"幸せの青い鳥"ならぬ"青いアマガエル"の登場で話題を呼びましたが、発見した御本人はしばらく飼った後、自然に帰してあげたそうです。暗いニュースの多い今の世の中で何とも可愛く心暖まる話ですね。

友の会だより

〔工石山自然観察会〕

2004年4月29日(木・祝)〔参加者　大人:21、小人:2、犬:1、講師:恒石直和(高知市子ども科学図書館指導員)、加茂信三(サンショウウオ研究家)〕

新年度最初の友の会の行事として、工石山のアケボノツツジの群生とそこに棲むサンショウウオの観察を行った。

工石山(標高1176.8m)は、高知市の北方に位置し、高知市民の飲料水の源である鏡川の源流域に当る。昭和42年に全国で最初に自然休養林に指定された「工石山自然休養林(国有林)」内の最高峰で、南には高知市街と太平洋が、北には四国山地の峰峰と西日本最高峰の石鎚山が一望できる。

例年は4月の下旬がアケボノツツジとトサノミツバツツジ(牧野富太郎博士の発見・命名による横倉山タイプ植物)の見頃であるが、今年は4月22、23日に異例の30℃を越す真夏日となったこともあり、植物の開花時期、成長が1週間ほど早まり、淡い紫色のトサノミツバツツジがわずかに残っていただけで、残念ながらアケボノツツジはすでに花を落としてしまっていた。シャクナゲ(ホンシャクナゲ)は5月中下旬が見頃でまだつぼみであったが、尾根伝いの登山道沿いに100メートル以上にも渡ってトンネルのように群生する光景は圧巻であった。

工石山は、県内ではサンショウウオの生息地として知られ、この日は幸運にも石の下に潜むオオダイガハラサンショウウオを見ることができた※。県内で確認されている5種類のサンショウウオのうち、ここ工石山にはその内3種類が生息する。

"清流のバロメーター"であるサンショウウオが、高知市民の飲料水の源であるここ工石山に生息しているという事実を真剣に受け止め、いつまでも生息できるような美しい自然環境をみんなで守っていきたいものである。

※むやみに石をはぐってそのままにしたりすると、サンショウウオの卵が乾燥して孵化できず子が死んでしまうので、やらないで欲しいとのことです。

〔横倉山野鳥観察会〕

2004年5月23日(日)〔参加者　大人:10(内事務局3)、講師:深瀬茂文(日本野鳥の会高知県支部会員)〕

横倉山はアカガシの原生林を初めとする自然林がよく残り、従って、そこに生息する野鳥の数も結構多いが、野鳥に関する最近の調査はなく、不明な点が多い。ただ、高知県の鳥であるヤイロチョウ〔県指定文化財〕が毎年飛来し、クマタカの親子の姿も確認されている。

鳥の活動は朝が早いため、横倉山の一番上の第3駐車場に朝8時30分に集合し、遊歩道に沿って歓傍山眺望所まで観察する。車から降りるともうそこはアカガシの原生林の一部で、あちこちで野鳥の可愛いさえずりが聞こえてくる。野鳥の会のメンバーはさすがに視力・聴力に優れ、一般の人間には聞こえないような遠くの小さな鳥の鳴き声までも聞き取ることができる。しかも驚いたことには、鳥によってはいろんな鳴き声をし、中には他の鳥の鳴き真似をするものもいるが、それをも聞き分け、それがどういう時(求愛・警戒など)の鳴き声かもわかるという。この日は、"森の歌い手"と呼ばれるクロツグミを初め、シジュウカラ・アオゲラ・オオルリ("日本三鳴鳥"の一)などのさえずりがよく聞かれ、アカショウビン・アオバト・カケス・キビタキ・コゲラ・ゴジュウカラ・ヤマガラなど10種類以上の野鳥の声を、こぼれ日の差す原生林の中のひんやりとした心地よい中で聞くことができ、心が癒される思いがした。横倉山ならではの鳥としては、アカショウビン(赤翡翠:カワセミ科)が挙げられる。

また、この日の参加者の中には、植物研究家もいて同時に植物の観察も兼ねることができ、大変充実した観察会であった。よくを言えば、地元の自然に親しむという意味でも子どもたちの参加があれば良かったと思う。

《博物館友の会「フォレストクラブ」の平成16年度の活動予定》

- ●4月29日(木・祝)　工石山の自然観察(アケボノツツジ・サンショウウオ)
- ●5月16日(日)　友の会運営委員会
- ●5月23日(日)　横倉山野鳥観察会
- ●5月30日(日)　友の会総会
- ●6月19日(土)　ヒメボタル観察会 ―横倉山杉原神社―
- ○7月11日(日)　天体教室　―昼の金星観察―
- ○7月18日(日)　横倉山自然の森整備 ―遊歩道の標識設置等―〔社団法人:国土緑化推進機構　緑の募金公募事業〕
- ○7月24日(土)　ムササビ観察会(山小屋キャンプ) ―横倉山杉原神社―
- ○9月　日高村錦山のドウダンツツジ観察会
- ○10月　島根県「ハンザケ(オオサンショウウオ)資料館」視察研修会
- ○11月　木の根を守る　―山のダムづくり―〔社団法人:高知県森と緑の会公募事業〕
- ○12月19日(日)　クリスマスリース教室
- ○2005年1月1日(土)　横倉山初日の出

博物館ニュース

〔資料寄贈御礼〕

名古屋大学理学部の星野光雄教授を介して、蜂須賀栄治様（日本地質学会会員・名古屋市在住）より、『地質学雑誌』〔1947年（昭和23）～2003年（平成15）・製本〕を御恵贈頂きました。戦後の日本の地質学の研究の歩みを知る上で大変貴重な学術資料であり、博物館では、『蜂須賀文庫』として大切に永久に保管し、研究者のために広く活用して頂きたいと思いますので、是非ご利用ください。

企画展〔共催〕：『西村洋一水彩画展　―風がはこぶもの―』〔2004年4月24日（土）～5月23日（日）〕

水彩画家・西村洋一氏（高知県窪川町）の、主として春をテーマとした作品34点と8編の詩を展示。好評だった昨秋の秋をテーマとした企画展の第2弾。

（西村洋一氏）

西村氏の繊細で心のこもった、絶妙の色彩で描かれた水彩画の魅力に引かれ、今回も再来の、町内外の多くの来館者にさまざまな感動を呼んだ。そのいくつかを紹介すると、「何度観ても心洗われる感動があります」（窪川町・女性）、「こころ深く癒されて、癒されて感謝申し上げます」（高知市・女性）、「感動を有難う。私も今を大切に生きていきます」（高知市・女性）、「『生きる』ということを考えさせられました。素晴らしい絵との出逢いをありがとうございました」（須崎市・女性）、「初めて観せていただきました。立ち止まって動けない自分がいました」（広島県・女性）。

博物館日誌（抄）（'04.3～'05.3）

●3月27日（土）　第6回博物館協議会
●4月24日（土）～5月23日（日）
　企画展（共催）：「西村洋一水彩画展－風がはこぶもの－」
○7月24日（土）～9月5日（日）
　企画展：「仁淀川の自然展」〔協力：NPO法人　仁淀川お宝探偵団〕
○7月25日（日）　化石教室
○8月7日（土）　夏休み博物館教室〔植物〕
○8月8日（日）　夏休み博物館教室〔昆虫（水生）〕
○8月22日（日）　夏休み博物館教室〔化石〕
○10月2日（土）～11月7日（日）
　企画展：「南海大地震展」
○2月中旬　企画展：「仁淀川写真展」

スタッフの声，声，声

（斎藤） 身の周りの自然に少し興味を持ち始めると、今まで見えなかったものが見えてくるようになります。見ていたはずですが気に止めなかったということかも知れません。生活している周辺にも小鳥の囀り、草花や昆虫など様々な動植物の生きている姿が目に止まるようになります。多くの方々が自然環境について少し興味を持っていただくと、今までと違う景色が見えるのではないでしょうか。

（小田） "横倉山の魅力"を再認識する場面に遭遇しました。野鳥観察会の下見で横倉山に登った5月のある日、山中でアカショウビン（雨乞鳥）の鳴き声を聞いたのです。「ヒョロロロー」と。しかも、3ヶ所で！感激したのは、私の口笛に反応してくれた？こと。警戒する声で何分も。想像してみてください、この時の何とも言えない心地良さ。

（安井） 今年は4月22、23日に異例の真夏日を記録するかと思えば、その数日後には一転して真冬に逆戻りするなど寒暖の差の激しい年となった。植物の開花も一週間ほど早く、横倉山系で新たに見つかったアケボノツツジの群生を観ることができなかった。とはいえ、季節は着実に巡っていく。今年は春早々から自分の生涯の中で一生忘れることのできないいろんな出来事があった。飛び交うホタルのほのかな光をいつもとは違った気持ちで観ることになった。

（小松） 博物館の3階展望所の手すりにアマガエルがいました。うずくまり、桜の葉っぱを眺めていました。いったいここまでどうやって来たのか？ジャンプか？無理だろう。よちよちと、コンクリートの垂直な壁を登ってきたのだろう。もうすぐ雨が降ってきそうなので、ゆっくり雨宿りしてください。降りるのは大変そうですが大丈夫ですか？

（伊藤） 最近、家の前を流れる仁淀川にいることが多くなりました。先ず仕事の後に、ハヤ釣りを日が暮れるまでします。あまり上手でないので、川底や草をよく釣り上げています。その後待ちかねたイヌに引っ張られながら河原へ散歩に行きます。いつもは空を眺めながら歩きますが、ホタルが飛び始めたのでそれを楽しんでいます。

（黒原） 当館で使われている何気ない"お土産袋"。…実は事務員の手作りだったりします。現在使われているものの柄は3種類。みんなに人気の博物館の"トリケラトプス"、ちょっと静かな雰囲気の"ヨコグラックバネ"、それにキャラクターの"横倉山三獣士"です。印刷色や紙の色…その時々にあわせて作り、お客さんに渡せるようにしてあります。作る人によって器用・不器用があるので、きれいな袋、時にはちょっとくずれてる（？）袋もあったりしますが、お土産を買った際には、ほんのり気にしていただけたら幸いです。

（福岡） 何時だったか、博物館の池で"カラスの行水"を見ました。普段はゴミをあさる姿しか見ていないので汚いイメージだったんですが、水という「自然」の中では奇麗でした。改めて、「自然」の偉大さや、大切さを実感した瞬間でしたね。

仁淀川フォトコンテスト

■横倉山自然の森博物館 企画展［仁淀川の自然］

清流・仁淀川は、
愛媛県の石鎚山に源を発する
幹線（本流）：124kmに及ぶ一級河川で、
高知県の三大河川の一つです。
東西方向に帯状に配列する四国の地質帯を
縦断する格好で流れているため、
流域の地形も変化に富み景勝地も多く、
また、川底や河原には色とりどりの
実にさまざまな種類の石ころが見られ、
類希な大変美しい河川であると言えます。
横倉山自然の森博物館では、
仁淀川とその流域に見られる四季折々の
さまざまな自然（風景、動植物、沈下橋、
棚田など）の風物を中心とした
写真を募集します。
なお、応募頂いた作品は、選考の上
博物館における写真展［平成17年2月予定］で
展示・公開します。

〔募集要項〕
●テ ー マ：仁淀川の美の発見。
●応募資格：年齢、職業（プロ、アマ）等は問いません。
●応募方法：
・四つ切り以上でパネルにしたもの（4枚までの組写真も可）。カラー、モノクロは問いません。
・一人何点でも応募可能。
・未発表のもので、応募する一年以内に撮影したもの。
・応募写真の裏面に1.作品のタイトル、2.住所、3.氏名、4.年齢、5.性別、6.電話番号、7.撮影年月日、8.撮影場所を明記してください。
・応募作品は、原則として返却いたしません。
・応募作品のネガ等は、審査発表まで保存しておいてください。
・入賞作品の著作権は、横倉山自然の森博物館に帰属します。
●応 募 先：
〒781-1303高知県高岡郡越知町越知丙737-12
越知町立横倉山自然の森博物館
『仁淀川フォトコンテスト』係
●応募締切：平成17年1月15日（土）
●発　　表：高知新聞紙上、越知町広報誌上　他
［平成17年2月予定］
●審 査 員：岩崎　勇（写真家、県展無鑑査・審査員）
吉岡珍正（越知町長）、片岡重敦（教育長）、
斎藤政広（館長・生涯学習課長）、他2名
●賞：金賞（1名）……賞金　5万円
銀賞（1名）……賞金　2万円
銅賞（1名）……賞金　1万円
入選（20名）……記念品

仁淀川・浅尾橋（越知町）

高知県越知町立
横倉山自然の森博物館
THE YOKOGURAYAMA NATURAL FOREST MUSEUM, Ochi
〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12
TEL0889(26)1060 FAX0889(26)0620

●開館時間：午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
●休 館 日：毎週月曜日（祝日の場合は翌日）
12月29日から翌年の1月3日まで
●入 館 料：大人……500円
高校・大学生……400円
小・中学生……200円
（※各20名以上の団体は100円引き。）
●越知への交通
高知 ―JR特急 約36分／JR普通 約50分― 佐川 ―バス 約15分― 越知

PRINTED WITH SOY INK 地球環境にやさしい再生紙と大豆油インキを使用しています。